

「気になることがあるんだ」

吉沢がいった。

「何が？　きのう食べた蟹の行方か」

潤木はハリスを注意深くチヌバリに結びつけながら答えた。二人が正面にしている窓は、荒々しく海からの風が吹きつけ、バルコニーに通ずるドアのすきまから、ヒューという甲高い音とともに流れこんでくる。

「そんなのじゃない」

怒ったように吉沢は絵具をとく手を休めていった。パレットのかたわらにおいた煙草のパッケージから一本ふりだし、火をつける。

「お前、近頃、煙草の量がふえたんじゃないか。やたら吸ってるみたいだぜ」

「こんなものさ。そっちの量が減ったから、そう感じるだけだ。死ぬのが怖くなってきたんだろう。財産が増えてきて」

「ふん」

潤木は馬鹿ばかしいというように鼻を鳴らした。

「財産といえるほどのものかよ。東京だったら、一坪の土地に換えられるかどうかも怪しいぜ」

「それでも手に入らない人間は大勢いる」

ふたりがいるのは、千葉外房の海を見おろす高台の別荘だった。大手の観光開発業者が海沿いに建てた百軒近い別荘のひとつ、海に向かって壁面が一枚ガラスになったコンドミニアムだ。十五畳の広いリビングと八畳、六畳の和室を備えている。天気の良い昼間ならリビングに居ながらにして水平線を見おろすことができる。海までは車で五分の距離だった。

夏の海水浴シーズンは終わっていたが、海で遊ぶには、釣りが残っていた。二年前にこの別荘を手に入れて以来、潤木は急速に釣りに凝り始めていた。

はじめは、夏の晩、堤防で悪戯半分に行ったアジ釣りだった。そこに外道で小鯖や鯛がかり、秋になって偶然、小さなシマアジを釣りあげて以来、病みつきになった。

磯釣り用の竿やリールを買いこみ、キスやクロダイ、イシダイを狙うような仕掛けも揃えだした。

潤木は三十六歳の独身で、吉沢とは高校以来のつきあいだった。高校を卒業すると、ともに上京し、吉沢は美大へ、潤木は受験に失敗した挙句、シテイマガジンの編集の仕事へと進んだ。

その後、独立した潤木は、小さな広告製作会社を設立した。ちょうどイラストレイターとして人気が始めていた吉沢と組み、デパートビルや銀行などの壁面イラスト広告で成

功をおさめた。会社の人員が五名から一気に倍以上の十二名に増え、元来が怠け者の潤木はさつさと現場から身を退いてしまった。

今は自宅である東京世田谷のアパートにはほとんど帰らず、外房の別荘で一年の大半を暮らしている。

吉沢の方は二十二で結婚し、二十六で自分の事務所をおこした。潤木の広告製作会社とともに順調にのびたが、去年の夏から「充電」と称して一年間の休養に入った。夏から秋にかけて、ニューヨークやパリ、ロンドンをうろつき回り、十一月の初めに帰国したのだ。成田空港まで迎えにいった潤木が、四カ月ぶりに会った吉沢にいったセリフがこうだった。

「おい、エスニック料理の食い過ぎで中年腹になったのじゃないか。少ししぼりこんだ方がいいぜ」

嫌な顔をした吉沢だが、その必要性は感じていたらしい。十一月の半ばに入って潤木が、「二週間ほどシェイプアップ合宿をしてみないか」

と誘うと、車にイーゼルを積みこんでやってきた。油絵を久しぶりにのんびり描きたい、というのが妻子への方便になったようだ。

もともと上京してしばらく金のない間、一間のアパートで共同生活を送ってきた潤木と吉沢は、同じ屋根の下で暮らすことに抵抗を感じずすむパートナーだった。独身が長い潤木は、料理も慣れていて、外房のちゃん食堂よりは、はるかに秀れた食事を作ること

ができる。吉沢の方も、学生時代は自炊をしていたので、ちよつとした軽食でいどなら、短時間に仕上げるコツは身につけていた。

「合宿」のはじめの一週間、ふたりとも早起きをして、ジヨギングやウエイトレニングなどに励んだが、筋肉痛がピークに達する三日目には、メニューを軽減し、それでも、「やらないよりはマシ」

を口癖に、ひどく簡単なメニューだけを残して、釣りとゴルフに終始する日々だった。

荒天でそれすらできぬ日は、雨に煙った海を眺めながら、学生時代以来、ついで他人とはかわさなかった、政治や文化についての議論、女に關しての馬鹿話で時間をまぎらわせた。

あいまに、吉沢は油絵を描き、潤木は「いつかやる」と広言していた小説を書いた。

「だから何が気になるんだ？」

夜釣り用の仕掛けを、自分で工夫したプラスチック板に巻きつけ、道具箱にしまいいんだ潤木は訊ねた。

「道さ」

「道??」

立ちあがり、一週間の食糧をストックできる巨大な冷蔵庫から缶ビールをぬきだして、潤木は吉沢の斜めうしろにアグラをかけた。

吉沢が動かしている絵筆は、愛娘の頬に、ふんわりした朱色を注ぎこんでいる。

「この別荘地の裏に、駅まで降りていく道があるだろう。お前さんが、夏、サーファーや海水浴客で国道が混むとき、買い物に使うといっていた道さ」

「ああ、あれか」

「きのう、買い出し番だったから俺は、あの道を使ってみたんだ。前に教わったとき、トンネルを抜けたところで、さっと海への眺望が開ける場所があったのを思い出してな」

「うん、あるな」

潤木は頷いた。房総半島を縦割にする国道を斜めに外れ、海岸線へと下っていく道だった。ほとんどが粘土質の丘で、畑にもならない傾斜地である。トンネルが多く、道が狭い上に、見通しの悪いカーブがつづくので、地元の車ですら減多に通らない道だ。海岸線に近づいてようやく、民家やモーターがぼつりぼつりと建っていた。

「俺は知つての通り、風景画は油じゃ減多に描かんが、あそこ眺めだけはスケッチしてみようかと思つてな」

「あそこは磯っ鼻に近いからな」

磯っ鼻というのは、地元での呼び名で、海めがけて突出した断崖だった。細長く険しいため、海から移ることはできない。陸つづきで渡るには、車を放棄して長いけもの道を徒歩で進まなければならない。そのせいか釣り人も減多に入らず、大物のインダイやシマアジ、ヒラマサが来るといふ噂があった。ただし足場が悪く、シケが来ると強い波が叩きつけるため、なかなか近づく釣り人はいない。

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。